

## 第5回全国海外子女教育・国際理解教育研究中国ブロック大会

## 第16回広島県国際理解教育研究大会

大会テーマ 地球・世界的な視野をもった国際教育の推進

日 時 平成23年8月17日（水）

会 場 広島県立総合体育館

主 催 NPO 法人全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会（全海研）  
広島県国際理解教育研究協議会（広国研）

後 援 文部科学省 （財）海外子女教育振興財団  
広島県教育委員会 広島市教育委員会 山口県教育委員会  
岡山県教育委員会 島根県教育委員会 鳥取県教育委員会

## 報 告

第16回広島県国際理解教育研究大会並びに第5回全国海外子女教育・国際理解教育研究中国ブロック大会が広島市の広島県立総合体育館で開催されました。午前中の分科会では4分科会に分かれ、実践報告や発表をもとに、熱心な実践交流や研究協議がなされ、各分科会とも研究を深めることができました。岡山県からは第3分科会「外国語活動」で玉野市立宇野小学校の山田 雅人先生が「楽しくコミュニケーションする子ども～心広がる英語活動～」と題して実践報告をしました。＜要項並びに分科会報告参照＞

午後の全体会では広島県国際理解教育研究協議会から「広国研の取り組みについて」という題で広島県福山市立伊勢丘小学校 林 万青也教頭から研究報告があり、その後全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会 齋藤 仁副会長から「在外教育施設・海外子女をめぐる情報」という題でお話がありました。またそれに続く記念講演では鳴門教育大学 兼重 昇准教授から「これからの国際理解教育と英語活動」と題してお話がありました。

小学校外国語（英語）活動はともすれば「歌」と「チャンツ」や「ゲーム」をして終わりというパターンに陥りやすい。「ただ単におもしろい」で終わるのではなく、「自分で考え、興味をもって学習して面白い」と感じる授業でなければならないということ。言葉・数字・形・色など様々なものには“意味”があり、場面の中にあってこそ意味を持つ。場面と学習を切り離さないで指導することが大切であること等・・・外国語（英語）活動を進めていくうえで大切なことを教えていただきました。

広国研の「集まれ！小さな外交官」の実践は第4分科会「国際理解教育」でも実践が報告されました。海外から日本に帰国した子どもたちの集いを計画し、参加した子どもたちが悩みや本音を語り合う取り組みを通して支援していくという全国でも数少ない実践で、「帰国子女の現状報告」からは帰国子女に対する学校の受入体制の問題や日本の教育につきつけられた課題がいくつ

か明らかになりました。また、林教頭から報告された「テディベアプロジェクト」は人間ではなく、「そら（日本）」と「ビリー（米国）」というテディベアがホームステイし、そのベアの気持ちを考えて日記を書き、帰国するときにその手紙を相手に届けるというユニークな実践でした。相手意識をもつことにより、相手を知ることが自分を知ることにつながり、自分たちは多文化の中で生きていることに気づかせるという実践でした。

午後からの全体会の中で特に心に残った2つの指摘を紹介します。1つは開会の挨拶で広島県国際理解教育研究協議会の清住会長が言われた「みなさんの学校では『国際理解教育』をきちんと教育課程に位置づけているでしょうか。しかもそれを外国語活動のみに矮小化することなく実践しているでしょうか」という問いかけ。そして2つめは齋藤全海研副会長の「帰国子女や帰国した派遣教員は『カルチャーショック』と帰国してからの『リエントリーショック』の二つの困難を経験している。帰国した派遣教員は帰国した時の違和感を忘れず、リエントリーショックの体験者として①帰国児童生徒への共感的指導を、そしてカルチャーショック体験者として②外国人児童生徒への共感的援助をしていかなければならない」という指摘です。帰国した派遣教員にとっては、忘れかけていた何かを思い起こさせてくれる大切な指摘だったと思います。

## 分科会報告

### 第3分科会「外国語活動」

#### ◇実践報告

「人とのかわりを体験的に学ぶ外国語活動」

安保 友理 教諭（広島県尾道市立日比崎小学校）

「楽しくコミュニケーションする子ども ～心広がる英語活動～」

山田 雅人 教諭（岡山県玉野市立宇野小学校）

#### ○トーキングテーブル・アドバイザー

都築 勉 校長（岡山県岡山市立富山小学校）

#### ○コーディネーター

中川 浩行 教諭（広島県福山市立新涯小学校）



安保 友理 先生の報告



山田 雅人 先生の報告



山田 雅人先生の報告を熱心に聞いている参加者



分科会のまとめと指導助言をする  
トーキングテーブル・アドバイザー  
の都築 勉校長

◇1本目の安保先生の報告は「人とのかかわりを体験的に学ぶ外国語活動」というテーマで「外国語活動を通して、言語活動に関する関心を高めていくような体験を積み重ねていけば、相手意識をもち、さまざまな方法を駆使しながら、積極的に自分の身近なことについてコミュニケーションをとろうとするだろう」という仮説のもと、特に「聞く」活動に重点を置き、実践した内容でした。ALTの先生からビデオメッセージを子どもたちにもらい、「ALTの先生に伝えるため」という“英語を使う必然性”や“自ら伝えたい”と思うしかけを意図的に学習に組み込んでいるところが参考になりました。また、小・中のつながりを大切にした取り組みでは“日比崎カリキュラム”ということで小・中の教員が一緒に研修し小学校1年生の外国語活動から中学校外国語科のスタートカリキュラムを小・中の教員が一緒に作っているという報告で、小・中のつながりについて参考となる提案でした。

◇2本目の山田先生の報告は「楽しくコミュニケーションする子ども ～心広がる英語活動～」というテーマで、外国語活動を学校の特色に位置づけ、コミュニケーション能力の育成を学校全体で取り組んでいるという実践報告でした。5、6年生だけでなく、1年生から6年生まで全学年で学校独自の年間計画にそって、英語活動の授業を実施し、日本文化の発信（6年）や英語集会（全学年）など学校行事の中に実践の場を設定して取り組んでいる様子。また、行事やイベントを打ち上げるだけではなく、朝の会、帰りの会を英語で、しかも子どもたちが自主的に進めているという毎日の実践、隔週月曜日に「ハロータイム」という時間を設定し、教員が自主制作したビデオを各教室に放送し、英語の歌や基本的な会話を学習する等、子どもたちが日々楽しく活動する様子が伝わってくる実践報告でした。……また、教職員が率先して英語活動を楽しむ姿勢、子どもたちの実態にあわせて教材を作成していることや8年前にはじめた英語活動の取り組みを子どもたちがかわり、転勤等で教職員のメンバーがかわってもずっと継続して取り組んでいることに対し、参加者から取り組みを評価する感想や意見がだされました。

#### ◇トーキングテーブル・アドバイザー（都築校長）より

お二人ともお忙しい中、実践をまとめてこの分科会で実践発表していただき、ありがとうございました。外国語活動の実践に取り組んでいく上で大変参考になる実践や問題提起をしていただきました。参加者のみなさんも積極的に参加していただき、実践交流や研究協議を深めることができました。

我々人類は地球市民として「地球規模で考え、足もとから行動する」ことを求められています。どこの国や地域にいてもこのことから無関係でいられる人はだれもいません。

地球上には様々な人々が暮らしています。日本人とは違う考え方、感じ方を理解し、地球市民として諸外国の人々と手を携えていかなければなりません。そのためにはコミュニケーション能力を身につけることが必要になってきます。英語は諸外国の人たちとコミュニケーションを図るためのツールの1つとして重要であることは言うまでもありません。

では、どういう子どもが育てば小学校外国語（英語）活動の目的を達成したことになるのでしょうか。前文部科学省調査官である菅 正隆先生（現大阪松蔭女子大学教授）はその問いに対して「中1の最初の英語の授業で、自分のことをたどたどしくても英語で発表できること」と具体的姿として答えられました。流ちょうな英語を話すが自分の思いを語れない人を育てるのではなく、身振り手振りなどもつけくわえながら、たどたどしくても自分の思いを相手に伝えようとする意欲や態度（コミュニケーションの素地）を育てることこそ大切なのではないのでしょうか。また、菅先生は「英語活動は、教科による英語教育ではない、国際理解教育の中での英語活動である」ことも指摘されました。小学校の外国語（英語）活動は中学校の外国語（英語）科のためにあるのではない、ということです。小中連携で中学校に求められているのはむしろ、「小学校外国語（英語）活動の延長」の部分ではないのでしょうか。今回の広島大会の成果を踏まえ、子どもたちのために日々実践を積み重ねていきましょう。